

「薬をください」

—ザンビアの農村における医療事情—

吉 村 友 希 *

「ペレニコ ウムティ (*Peleniko umuti*)」

ザンビア共和国北部にあるベンバの人びとの村に滞在している間、私はこの言葉にずっと悩まされていた。ペレニコは日本語で「ください」、ウムティというのは「薬」を意味するベンバ語の言葉で、「ペレニコ ウムティ」というのは「薬をください」という意味である。「頭が痛いから痛み止めが欲しい」、「マラリアなんです、薬をください」。そう言ってたくさんの村人が訪ねてくることに、私は困惑していた。村の人たちは、日本から来た私は薬をたくさん持っていて、日本の薬はよく効くものだとして認識しているようだった。

明らかに具合が悪い様子で、つらい症状を訴える人もいたが、「しんどそうな顔」を作って私のところへやってくる人もいた。薬を持っているならば気前よく分けてあげればいいと思うかもしれないが、3ヵ月間の滞在のために私が持参した薬の量は、村の人たちに配るには足りない。また、私には薬の専門的な知識がないため、副作用やアレルギーが発症する可能性を考えると、不用意に薬を渡すことに抵抗を感じていた。そしてなにより、外国人に欲しいと言えば物がもらえる、

という風に思われたくないという気持ちが強かった。どのような対応をすることが正解なのか分からずに悩み続けながら、「薬は持っていないません」、「もうなくなりました」と嘘をついて、その場をやり過ごしていた。薬がもらえないと聞いて、「薬をくれないなら、あんたに用はない」とでもいうかのようにその場を立ち去る村人のことを、複雑な気持ちで見送ったことが何度もあった。

頻繁に薬をもらいにくるということは、薬へのアクセスがないということだと考え、私は、この村の医療事情は相当悪いのだろうと思い込んでいた。そんな矢先、お世話になっている調査助手の3才の娘ナンシー（仮名）が高熱を出した。いつも元気に走り回っているナンシーがつらそうにしている姿を見て、私は薬をあげるべきかどうか、とても悩んでいた。明朝になっても熱が下がらなかったため、ナンシーの母親は、「クリニックに連れて行く」と言って娘を背中に背負い、朝から自転車で出かけて行った。

夕方になって、ナンシーと母親は、子ども用のマラリア治療薬と「パナード」という鎮痛解熱剤を持って家に帰ってきた（写真1）。クリニックで検査を受け、マラリアにかかっ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

っていると診断されたそうだ。「検査と薬のお金はどうしたのか？」と聞くと、無料だという。医療へのアクセスが何もないと思っていた私はこの話を聞いて驚いた。村人は、無料で薬をもらえるにもかかわらず、なぜ私のところに「薬をください」と言って来るのか！？ いったいこの村の医療事情はどうなっているのか？ 疑問に思った私は、この村をとりまく保健や医療事情について調査をすることにした。

村の人がいう「クリニック」というのは、正式にはヘルスセンターと呼ばれるもので、国の医療機関である。ザンビアの保健制度では、医療機関が5段階に分かれている[Ministry of Health 2013]。レベル1～3までに区分された病院（ホスピタル）があり、その下位にヘルスセンターが位置する。末端機関には後述するヘルスポストが位置づけられている。ヘルスセンターは、都市に409カ所、農村部には1,131カ所存在し、都市部にあるアーバンヘルスセンターと、農村部にあるルーラルヘルスセンターの2つのタイプ

に分類される。ヘルスセンターで受けられるのは簡単な診断や処置に限られており、手術を実施するような設備は整っていないため、十分な医療が受けられるわけではない。ただし、受診料や薬代はかからず、誰もが診察を受けることができ、薬にアクセスできるようになっている。

調査地域にあるヘルスセンターを訪れたところ、診察が始まる前に、既に患者が開院を待っていた（写真2）。来院者の多くは、子どもを連れた母親であった。ヘルスセンターには看護師が1人と、専門家ではないスタッフが2人しかおらず、人員不足が課題であった。また、国から配分されるはずの薬やマラリアの検査薬などが不足している状況で、十分な医療を受けられる環境ではないことも分かった。しかしながら、設備が整わないなかでも、「アンダーファイブ」と呼ばれる5歳以下の子どもの定期健診や、妊産婦の健診や指導などを実施しており、「特に妊産婦への健康指導が一定の成果をあげていて、出生児や妊婦の死亡率が下がっている」と、看護師は話した。もうひとつ、私が滞在する地域にはヘルス



写真1 村のヘルスセンターで配布されている鎮痛解熱剤（左）と子ども用のコアルテム（右）



写真2 ヘルスセンターとその開院を待つ人びと（ザンビア、ムチンガ州ムピカ県）

ポストと呼ばれる保健施設がある。ヘルスポストはザンビアの医療機関の 5 段階のなかで最も低いレベルにあたり、専門家ではなく、村人のひとりが、数週間のトレーニングを受けて、認定されたコミュニティ・ヘルスワーカーとして働いている。コミュニティ・ヘルスワーカーは、国から供給される薬を管理して、必要な人に与えたり、月に 1 回、村人を対象に、保健の知識を伝える勉強会を開いたりしている。ヘルスポストにも課題は多く、国からのサポートが十分ではないため、薬の不足や、妊産婦の健診を実施するためのベッドなどの設備が未整備であることなど、問題が山積している。それでも、村の人たちが最初にアクセスできる保健施設としては大切な存在で、具合が悪くなって薬が欲しいときに村人が最初に訪れるのが、このヘルスワーカーのところである。

また、国の医療施設とは別に、現在では、村のグロッサリー・ストアで薬を購入することができる。調査地には、村人が経営する複数のグロッサリー・ストアが存在しており、鎮痛解熱剤であるパナードや、フラジールというアメーバ赤痢の治療薬など、2~3 種類の薬を手に入れることができる。価格は 1 クワチャ程度（日本円でおおよそ 20 円）であり、村人でも手の届く価格で販売されていた。

このように調査をした結果、私が想像していたよりも、ザンビアの農村の保健医療は制度が整えられていることが分かった。もちろん、十分な医療制度が整っているとはいえ、実際に病院へ行けないことや、必要な薬がなかったせいで命を落とした人もいる。医

療従事者や医薬品の不足は、ザンビア全体として大きな問題であり、まだまだ人命がきちんと救えるような状況にまでは至っていない。調査地に一番近い街の大きな病院でも、処方する薬の在庫がないために適切な処置が施されず、命を落とす人が出ているという話をよく耳にした。

さらに、村人が保健や医療に関する知識を十分にもっていないという課題がある。たとえば、薬の飲み方をみていると、用法や用量を守らない人が多い。先に例として紹介したナンシーは、マラリアにかかって「コアルテム」という薬をヘルスセンターで処方された。コアルテムというマラリア治療薬は、一定の時間をあけて、処方された量を完全に飲みきる必要がある。ヘルスセンターで用法の説明を受けていたにもかかわらず、ナンシーの母親はそれに従ってはいなかった。たとえ制度が整い、薬にアクセスできるようになったとしても、それらを有効活用していくためには、村人への知識の伝達が次の課題になってくるだろう。

問題が山積しているとはいえ、薬や診察にお金がかからない制度には驚いた。国際社会や NGO による援助や支援が、この制度の背景にあるのだろう。たとえば日本政府は、「母と子供のための健康対策支援プログラム」に約 5 億円を供与して、ザンビアの地方の子どもの健康改善や、予防接種体制の強化を支援してきた。さらに、コミュニティ・ヘルスワーカーを中心としたプライマリー・ヘルスケア強化のための資金提供やワクチンの供与、保健分野に関わる人材の派遣などを通し

て、ザンビアの保健セクターへの援助を実施している。

遠いアフリカで医療を受けられずに困っている人のために何かしたいという「誰か」の思いが通じて、村の医療制度の改善につながったということなのか、と私は考えていた。しかし、村の人には「支援されている」というような意識はあまりないように思えた。ヘルスセンターに行けば無料で診察を受けられて、無料で薬を処方してもらえるという状況は、彼らにとっては普通のことなのである。ある日、私が「首都でマラリアの薬を買った」と話すと、「その薬買ったの？病院に行けば無料でもらえるよ？」と村人が少し驚いていた。

また、ヘルスセンターで働く職員に話を聞いたときにも、「薬が足りない問題は、きっと政府がなんとかしてくれる」と、自分ではない「誰か」が問題を解決してくれるのを待っている状況であった。「自分から動かな

くても、政府や外国人が良いものをもってきてくれる」、「問題があれば、誰かが解決してくれる」。保健や医療について、村の人たちにはそういった意識があるように感じられた。ベンバの村での経験は、「与える」ということの意味を考えさせてくれた。

2013年6月に開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD V）で、日本政府は、アフリカの保健システム強化や栄養改善に対して支援していくことを表明している。これから日本を含む国際社会は、アフリカの医療とどんな姿勢で向き合っていくのだろうか。

「薬をください」にどう答えるべきなのか、私にはまだ正解がみえていない。

引用文献

Ministry of Health. 2013. *The 2012 List of Health Facilities in Zambia: Preliminary Report* (Version No. 15). Lusaka, Zambia.